

企画書 No.125

●タイトル

F.Sプロジェクト (F.S = Find Storage)

●テーマ

「人は何の為に戦うのか？」

●ジャンル

ロボットアクション

●設定

世界観：

現在の日本に似たパラレルワールドが舞台。物語は「東京機巧研第一戦闘隊」に「機巧」のパイロットとして、一人の少女が配属されたところから始まる。「機巧」とは、十年前のある日、空から降って来た未知の人型戦闘機で、突然、人類を襲った。

「機巧」には一般兵器が殆ど効かず、人類は一方的な攻撃を受け続けていたが、ある日、鹿児島山中で見つかった「機巧」の残骸を改良し、有人機として使うことによって敵戦力に対抗し得る力を得た。

その「機巧」が倒した敵の「機巧」を捕獲することで人類は次々と戦力を得て、その数は四機（実働は世界で三機）に至る。

しかし、この「機巧」を扱うのには一つだけ大きな欠点があった。

その欠点とは、特殊なヘッドギアを装着しなければ指一本動かすことができず、搭乗して戦えば戦う程、脳が損傷して「パイロットは記憶を失っていく」というもの。

基本的に「機巧」は二人搭乗の作りになっていて「パイロット」と「補助役」のツーマンセルで戦う。主人公である「相模原颯」は日本の最前線となる東京機巧研で「補助役」を行う十八歳の男子。「補助役」に関しては記憶を失う危険性がなく、戦闘の状況から戦略変更を決断したり、索敵や機体内の気温調整、外部との連絡等を担当する。

メインキャラクター：

佐神 颯（さがみふう）

「東京機巧研第一戦闘隊」で一番腕の立つ「補助役」。十七歳。最初は高校に通いながらバイトとして「東京機巧研第一戦闘隊」の事務をやっていたが、遊びで試した「補佐役」が非常に巧かった為、スカウトされる。颯という女っぽい名前だった為、間違えてアルバイトとして採られたらしく、たまにネタにされる。

御堂 結紘（みどうゆずる）

元々アメリカの部隊に配属されていた十七歳の少女。戦争孤児。戦闘経験が多く、約九割の記憶を失っている。記憶がほとんどない為か、いつも苛立っていて周りを寄せ付けない。他人の手を借りようとせず、何でも自分で解決しようとする。手帳を持ち歩き、どんな時でも日記を付けるのが習慣。

●あらすじ

主人公である颯は高校が終わった後「東京機巧研第一戦闘隊」のある本部へ。新たに配属された一人の少女「御堂結絃」とタッグを組まされることになるが、結絃は記憶の九割を失っている為か、気性が荒く、隊にもうまく溶け込めない。

「機巧」は「パイロット」と「補助役」の二人のチームワークが非常に重要なのだが、彼女は腕に自信がある為か、殆ど颯の言うことを聞かずに一人で戦って敵を倒してしまう。颯は何とか結絃と根気よく関係を築こうとするが、なかなかうまくいかない。そんな中、颯は結絃のピンチを助ける状況に遭遇する。結絃は「余計なことをしないで！」と言いつつも、助けてもらったのを気にしているのか、次の日からチームワークも気にしだす。チームとして連携の取れた二人は強かった。二人は不器用ながらも「チーム」として次第に距離を縮めるが……。

ある事を切っ掛けに颯は「真実」を知る。

あれ？ おかしい。俺の記憶って正しいのか？ そういえば、対話中、過去の話に違いがあって会話が止まることがある。このことは物語冒頭でも気づかれない程度に描く。ある会話が決定打になり、颯は自らの記憶を疑い、作戦室でメインデータベースをハッキングして過去のデータを暴く。

実は記憶の九割を失っていたのは結絃ではなく、颯の方だった事が分かる。

しかも、颯は鹿児島で見つかった第一発見「機巧」の搭乗者だった。脳に深刻なダメージを与える「機巧」は扱いづらい為、発見された異星人を主に搭乗者として再利用していたのだ。敵として襲来した「機巧」が有人機であったことすら秘密扱いで、民間人は知らされていない。仮に搭乗中の異星人がおかしな行動をとった場合は、遠隔手動ボタンで爆発するよう身体の一部に仕掛けまで施してあるらしい。

颯は機密文書の中の「再フォーマットの手順」という項目を読んで察する。

恐らく、俺を「補助役」としてある程度使った後、再びパイロットに戻すということか。颯は真実に絶望し、感情的になる。「東京機巧研第一戦闘隊」も脱隊すると告げる。だが、機密文書データのハッキングの件で拘束される。室内には監視カメラが付けられ、ネットも使用不可の状態に。そんな中、敵機が東京上空に現れる。

颯は協力を拒み、結絃は一人で戦場に赴く。

そこで颯はある四ケタの数字を思い出す。何の数字か分からないが、嫌な予感がして部屋

中を漁るとクローゼットの中に鍵付きの鞆がある。思い出した数字を入れることでその鞆が開かれる。

そこには記憶を失う前に颯が書いた日記があった。颯が地球人として戦うことになったことの心配、日々、死と向かい合うことへの恐怖。同胞を殺すことの葛藤。色々なことが書かれていた。そして、補助役として出会った「御堂結絃」という少女のことが書かれていた。

最初は気に食わなくて、対立して、言うことを聞かずに喧嘩ばかりしていたこと。彼女の助けで危機を乗り越えられたことがあり、少しだけ見直したということ。

チームや彼女のことばかりがつづられていた。

「好きだ」とか「彼女のことを認めた」とかは一切書かれていないのに、何故か颯は涙が止められない。

颯は少しだけ思い出す。

彼女たちは——「東京機巧研第一戦闘隊」は、俺の記憶を取り戻すりハビリの為、俺の記憶が失われる前に起こった出来事を可能な限り忠実に再現していたのだ。

政府の反対を押し切り「記憶を失いたくない」と言った俺の為に。颯は思い出す。結絃に対する言いようのない気持ちも。不要となった自分が処理されそうになった際、彼女が替わりのパイロットとして志願する代わりに、今後、颯はパイロットにしないという約束を取り交わした事実も。

颯は駆け出していた。結絃を助ける為。

しかし、颯が目にしたのは、原型を留めない程に大破した結絃の「機巧」残骸だった。

颯は彼女が倒した「機巧」の一体に搭乗して残った敵機と戦う。

補佐役としての癖になっているのか、戦略を立てる為、戦闘中の通信記録等を再生しながら戦う。

『結絃、補助役を付けた方が良い。いくら君が優秀だっていってもこの数は無茶だ』

『いない』

『何故？』

『多分、この数を相手じゃ付け焼刃の補助役を付けても無理。それに私の補助役は一人しかいないからね……』

それが最期の言葉だった。

颯は活動限界時間を超えてなお戦い続ける。

彼女はもう死んでしまったから、彼女が守ろうとしたものが何なのかは分からない。

戦う相手が昔の同胞だったことも知っている。

それでも、颯は彼女が守ろうとしたものを守りたいと思った。

彼女の為に戦いたかった。ただ、それだけだった。

全ての敵機を倒し、全ての記憶を失った颯が取り残されて、物語は幕を閉じる。

※タイトルの「F.S (Find Storage) プロジェクト」のF.Sが颯のイニシャルで、颯の記憶を取り戻す計画とも読める。